頓首頓首、死罪死罪

８５子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
頓首頓首、死罪死罪

【Ｎコード】
Ｎ８１３３Ｊ

【作者名】
８５子

【あらすじ】
「ぼくは、あにうえと一体になりたいのです」
建安文学で活躍した人物たちを中心に、曹丕と曹植が確執を生ずるまでに至る過程を描く、連作短篇集です。
※実験的に書いているので、頻繁に修正が入ります。

序

「母上、これがわたしのおとうとですか」
「そうよ。あなたはおにいさんなのだから、これ、だなんて言うものじゃないわ」
「でも、まるきり猿のようです。赤ん坊というのは、みなこうなのですか」
「すぐに大きくなって、あなたのように立派な子になるわ。あら、だめ。つねってはだめよ」
「泣きました」
「ほら、あなたといっしょでしょう」
「わたしは、こんなみっともなく泣いたりはしません」
「強情な子」
「でも」
「でも、なに」
「かわいくないことも、ありません」

贈哥哥　あにうえへおくる

建安十年　二月　曹植

もろ脱ぎになった胸板は薄く、踏みしめた素足は細い。つま先は石畳の縁を飾る苔へと埋もれ、春夜の冷気で震えていた。産毛を残した頬。鳥肌。

曹植（そうしょく）は地を蹴った。

すかさず鞠を放りなげる。右手に持した剣も投げあげる。刃が空をきって大仰に光った。着地するやいなや、踊り落ちる鞠へ背を向け、こんどは踵で蹴りあげる。地に落ちる寸前の剣を捉え、また放る。剣と鞠へましらのようにじゃれつく。

居並んだ客人たちの呆然としたさまを横目に、植は愉快でたまらなかった。

先ほどしかつめらしく詩を吟じた口、口、口。どれもが緩みきった女陰のごとく間抜けな洞あなを空けている。

あほばかりだ。土台からして、湿っぽい年寄りどもと額をつき合わせての詩会というのが馬鹿らしい。こんな月の夜は飲んで愉快にやればそれでいい。

植の青い裸体を明月が彩る。宿星はしきりと瞬き演舞の拍子をとる。池の水草がそそと揺れる。

風。影。光。植の体は軽かった。死に絶えたように、世界はなんの音もしない。

静寂を破ったのは曹操だった。愛息子の道化がおかしくてたまらぬといった調子で、滅法に両手を打ち鳴らし腹をよじって笑い転げる。

主が乱れると同時に、あ然となっていた宴席もたちどころに打ち解けた。列座した文人たちがそれぞれに笑い声をあげる。ある者は

口元をおさえ、またある者はあたりはばからぬ大口をあけ、笑いさんざめく。
高枝の小鳥が鳴く。池で魚が跳ねる。飄風が植へまつわって楽しげに衣をひるがした。梅が散る。酒の香。歓声。一拍おくれた楽団がかしましく音曲を奏ではじめた。熟れたように赤くなった頬は夜風に青い汗を散らす。
植はわらった。
月夜の宴はこうでなくてはならない。騒がしく、無意味で、あきれるほどに楽しいのがいい。
道化をつづけながら上座へ目をやると、薄衣一枚でくつろいだ父の隣に、いかめしく髪を結いあげた曹丕(そうひ)の姿があった。快笑からひとり取り残された兄は、半端にくちびるを開いたまま凝然としている。
植はわらった。
丕の隣で空になった自分の座がうらめしい。あそこへ座って兄の顔を間近で眺めたかった。横から見れば、虚ろに没した口腔は高い鼻とつりあわずひどく間抜けに見えるに違いない。指をさして笑ったならば兄はどんな顔をするだろう。怒る。泣く。それとも。
曹操が立ち上がり、手で拍子を打ちながら即興の詩を詠じはじめた。客人からひときわ高い歓声が沸き起こる。
それは、植の耳には遠いもののように聞こえた。激しい舞踏に巻き起こった風が呻り耳を聾す。月光はますます冴え返り、肉を削ぐ鋭さで幼い裸身を照らしだす。
息が乱れる。土に塗れた爪先がぬめる。足元が危うい。汗でしとどに濡れた肩へ梅の花弁が降りかかった。膠でへばりつけたように肌へ一体となる。歓喜する客人の肌もことごとく上気し、毛穴からあがる湯気が宴席をおおった。蒸籠の中にも似た甚だしい熱気はむせ返るように濃密で、固く閉じた桃のつぼみが今にも綻び咲き乱れそうだ。意識は混淆として、胸の内が溶けてしまいそうに熱い。
哥哥(あにうえ)。

甘い息が植のくちびるから漏れた。視線を上座へ向けるが、しとどに流れる汗がまつ毛を覆ってなにも見えない。
見えないからこそ、押し殺した兄の息づかいがすぐ傍にかんぜられる気がした。植の耳朶へやわやわと流れ込む吐息は溢れんばかりの懊悩を含み、植は胸を締めつけられた。
植は悲しかった。
汗で閉ざされた瞼のうらへ兄の面影が宿る。長い眉。高い鼻。切れ長の目尻。
そして、眉間の皺。
苦悶を刻んだ丕の眉間が、植は悲しかった。
吁嗟(ああ)、哥哥。
植は跳躍した。石畳に爪は裂け、血がしぶく。飛剣が頬をかすめ落ちた。血。植は鞠をも打ちやって全身を放りだした。
つま先から指先まで、持ちえるすべての感覚をもって、かそかに聞こえる丕の息づかいへ没入する。破瓜を拒む生娘のような抵抗をかんじ、植はもがいた。
もっと奥へ行きたかった。いっそ兄と同体になってしまいたかった。
なりふりかまわずもがくと、ぶつんと大きな音がして粘膜は破れた。
破れた先にはやはり苦悩が充満していた。まるで膿のように粘粘と腐敗して、植の侵入を妨げる。押しのけ、掻き分け、ただひたすらに奥を目指す。
哥哥。
植は舞った。
肌へまつわる膿の先に悲哀がうずくまっていた。海のような、砂のような、広大な悲哀だった。
植は舞いつづける。
決して溶けることのない兄の峻厳な悲しみを内から燃やし尽くしてしまいたかった。食い込んだ枷を砕いて冷えた四肢へ血をめぐら

せてやりたかった。
植は舞いつづける。絡みつく血膿を舐め、すすり、呑み込んだ。
体毛の一本から臓腑の奥まで、兄のすべてと一体になりたかった。
植は舞いつづける。
哥哥。
植は舞いつづける。

弟兮弟兮　おとうとよ、おとうとよ

建安十年　二月　曹丕

「父上のおこころがわかりません」

「ならば死ね」

目が覚めた。

うつつへ戻りきらぬ眼を二三度またたかせ、曹丕は胸にもたれかかる弟の肩を抱いた。鳥獣の文様が縫い出された襟へ鼻をすりつけながら曹植は眠っている。

まどろんだわずかな間に夜気はずいぶんと冷えはじめていた。白絹の衫（さん）が肌蹴てあらわになった植の鎖骨を、丕は大袖で覆ってやる。

朱塗りの馬車は庭園を走る。車には蓋がかかっているが、斜めになった明月が射し込んで視界に困ることはない。

飄飄とあそぶ夜風に植の髻は緩む。ふしだらに揉み乱された毛先は汗に濡れ、小さな額へべっとりと粘りついた。

鼻を擦りつけて嗅いでみる。汗のにおいはまるでしない。

この年頃の自分はどんなだったろうと丕は考えた。

おもいだせはせず、子どものころはよかったということばだけが頭をよぎった。

十一になるころには父に連れられ戦場にいた。陣中で書を読む習慣はそのころ身についた。人前で詩を詠まされるのもあのころから変わらない。

いま現在となんら違ったことはないのに、幼かった日日はあたたかな手触りをもって丕の胸へ迫る。

いつからなのか判然としないが、父は冷たくなった。

そうと気づいたばかりのころは、ようやく一人前として扱われるようになったのだと浮かれすらした。庇護から外れることは寂しい

が、たれもが通らねばならぬ道だ。あの偉大な父から漢として見られることは何よりもうれしかった。
だが、すぐに違和をかんじた。
父は厳しいのではなく、陰湿なのだ。
兎の毛を毟るような目で丕の身ごなしを監視しては、情のこもらぬ冷たい嘆息をことさらに漏らす。
無言の非難に、丕は混乱した。だた、自分にはわずかな瑕疵も許されないということだけは悟った。
爾来、丕は襟をくつろげることすら慎むようになった。歯を見せて笑うのもいけない。酒を飲みすぎるなどもってのほかだ。息の詰まるおもいがしたが、反面これで父を納得させることができるという満足を覚えもした。なにか行き違いがあったに違いないのだ。そのうちにきっとまた笑いあえる。
それのおもいが水泡と帰すのにそう時間はかからなかった。息子が間違いを犯すことがないと知った父は、丕の性根が冷酷だとまわりの者へ零すようになった。丕は、文人たちと激しい議論を交わすよう努めた。文学に熱心な振りをした。熱い血がかよっていることを示してみせた。
理不尽。非難。冷たい目。気の抜けない日日がつづく。
丕は悟った。
父が死ぬまで、これはつづく。
どうと大仰な溜息が漏れた。肘掛へ頬杖をつく。おさまりが悪いのか胸にうずまった植がぐずる。丕は弟を抱き寄せ、その鼻先をおのれの衣紋へ埋めさせた。植は安心したように鼻を鳴らす。寝息が素肌へ吹きかかる。
その一息一息が、凝っていたこころを揉みほぐしていく。こういった植のあたたかさだけは、いつも変わらず丕へ安らぎをを与えつづける。
「哥哥（あにうえ）。ご一緒しましょう」
そう言って植はよく丕の寝台へ潜り込んできた。

掻巻きへくるまり丕の指を握る。それを躊躇なく自分のくちびるへと運び小さな歯で甘噛みをする。爪がふやけてしまうまで入念にしゃぶる。長い時間をかけて十指すべてを舐り尽くすと、こんどは決まって胸元へ顔を埋めにくる。丕の体臭が染みついた襟をすぼめたくちびるで吸いながら、抱いてくれとせがむ。腕をまわしてやるだけでは飽きたらず、植は必ず丕の素肌へ触れたがった。好きにさせてやると、寝巻きの襟元へ潜り込んで脇腹を撫でたりする。

喜びに開いたくちびるや幸福に緩んだこめかみを見るにつけ、丕はその無垢さに安らいだ。いつでも、植は無邪気で純真だった。

丕は、植の瞼へ触れる。

恥丘のように淡く盛り上がった眼球は、圧せば破れてしまいそうなあやうさで指を押し返す。柔らかい眉に、短い睫毛。額は白粉を刷いたように滑らかだ。針穴のごとき細かな汗の粒が鼻の頭いっぱいに浮いている。

口をつけ、舐めとってやる。淡い塩気はなんの癖も含んでおらず、植がまだ大人の男でないことを丕へ悟らせる。

いつまでも、こうしていられればいい。

唾液の粘った鼻を掻いて植は眠りへつく。

丕はじっとしている。

夜風が、いまだ果てぬ宴席から音曲を運んできた。ひそかな声で丕は異国の旋律を口ずさむ。

御者が馬へ鞭を入れる。軽やかな音はにわかに遠ざかり、やがて聴こえなくなった。息苦しかったあの宴が嘘のようだ。根を下ろしたような深い静寂へ、車輪がうつくしい音色を添えつつわたっていく。

植の短い睫毛へ触れる。

戦に駆け回り、新妻へかまけ、おもえば一年ほども植の寝顔を見ていなかった。抱きなおした弟の体は肩幅が随分と広くなっていた。丸かった顔も間延びしたような面長へ成長しつつある。

このまま苦労なく長じてくれればいい。ただありのまま、まっす

ぐに。
丕は、植の額へくちびるを落とした。
鳥肌がたった。
詩会の席。詩作の放棄。楽団は静まり返る。文人たちは青い顔。裸体。踊り狂う植。仙仙と体はしなり、天を指した指先が月に光る。すべてが死に絶えたように息をひそめている。植の足だけが、もつれるようにして激しく地を揉みたてている。
丕の臓腑は縮みあがった。
植の反抗に、父が激高することを恐れた。父の悪意が植へ向けられることを恐れた。そうなれば、きっと植は耐えられない。
丕には耐えられない。植の存在しない世など、植が忍んでこない褥など、植の肌が自分に触れてこない夜など、考えられない。
父に侵蝕しつくされるのは、自分だけで十分だ。
父の無防備な脇腹へ目をやる。刃の手触りを求める手に、汗が滲んだ。
あのとき、父が植を許さなかったらとしたら、自分は父を刺していただろうか。
丕は、弟をきつく抱いた。白く細い喉へくちびるを擦りつける。滴る唾液に湿った植の肌は、月影にさらされぬるめくように光る。
いつできたものなのか、植の頬に浅い切り傷があった。瘡蓋の張ったところがにわかに血を噴きそうな気がして、丕は必死に舌でぬぐう。
ぜったいに、害させはしない。
刻は深更に至り、夜は冷気を増しつつあった。濡れた肌には毒になる。汗にまみれた衣は、館へ着いたらかえてやらねばならない。
「父上のおこころがわかりません」
「ならば死ね」
かえてやる。おまえのためならば。

好儿子　よいむすこ

建安十三年　十二月　曹操

肉をぶち抜いた矢は、獲物もろとも緑土へ突き立った。
舞い上がった獣毛を馬蹄が裂く。曹丕は馬上から身を踊らせた。死にきらない野兎の震える耳を小さな手で掴み高高と掲げる。三つ口から滴る血が糸を引いて地へ落ちた。
孟夏の木漏れ日。
切れ長の目を眩しげに細めた丕の顔は、父の期待に応えたという矜持に満ち満ちている。
「よくやった」
息子が求めるであろうことばを曹操はかけてやった。
丕の目はさらに細められほとんど糸のようになる。濃い睫毛が陽を受けて白く強く輝いていた。
馬を進めて傍へ寄ると、熱風に煽られた血の臭いが猛烈に鼻を打った。操も下馬し小さな手に握られた獲物をとくと見る。
茶がかった毛並みは羊脂のごとく湿った艶を帯び、それでいて軽やかに靡いている。玉をなして滴る血が紅玉のごとく透けて清冽だった。なにより、巨大だ。若いころから狩りを好む操だったが、これほどの獲物を目にしたことがない。
「飛将軍李広であってもこれほどではあるまい」
漢王朝の英雄になぞらえてすら愛息子に対しては不足のようにおもわれた。子を持つ親は烏滸なものだということがわれながらよくわかる。
丕は、小さな鼻孔を得意げに膨らませ胸を張った。
「大したことはありません。わたしは、もっと大きなものを父上へご覧にいれてみせます」

「頼もしいことだ。次はなにを捕らえる」
「天下です」
「滅多なことを口にするものではない」
嘱望を苦笑へ押し込め曹操は丕の手首へ触れる。掲げた獲物はよほど重いらしく腕が小刻みに震っている。
「口だけではありません」
強がってみせるさまがいじらしい。
獲物を取り上げて、息子の腰へくくりつけてやる。重みによろけながらも丕は口元をほころばせた。
「わたしは父上のお役にたちたいのです」
三白眼の小さな瞳は玉佩に穿った穴のごとく文雅で理知的だ。高い鼻筋は菊の茎。薄いくちびるは酷薄に見えるが、細った月のように優美でもある。親の欲目だろうか。
視界の隅を過ぎったなにかへ、丕がすかさず矢を放った。
たいした息子だとおもい、操は苦笑した。また親の欲目だ。
新たな獲物を逃し地団駄を踏む丕をなだめ、抱き上げて馬へ乗せてやる。ほつれたおさな毛が操の頬を掠める。おもわず微笑んでしまうようななよやかさだった。
自分も乗馬し、丕へ馬首をよせる。小さな耳へ囁きかける。
「振り切れるとおもうか」
丕は白い首を回して後ろに控える従者たちを見た。幼いくちびるが百戦の猛将のごとく不敵につり上がる。
「父上がやれとおっしゃるなら、やってみせます」
「よく言った。いくぞ」
操は馬腹を蹴る。丕も蹴った。流星のごとく駆ける。後続を苦もなく引き離して、ふたりで駆けた。
駆ける。

目を開いた。
波の音。船底を打つ水の流れは中原そだちの体には馴染みがなく、

ただ不快におもわれた。
船の揺れに合わせ灯火も揺れている。もしくは風が吹き込んでいるのかもしれなかったが、船室の空気は凍てるほどに冷たく、たとえ外気が流れ込んだとしてもかんずることはできそうになかった。
操は倦んでいた。華やいだこころはとうに胸から去っている。新しい詩はできそうにない。
筆を投げ、卓へ肘をつく。天板に強く打ちつけた腕が、じんと痛む。さする気にもなれず、つい先刻たからかに詠いあげた詩を操は口ずさんだ。

酒に対しては当(まさ)に歌うべし　人生幾何ぞ
（酒を前すれば歌うしかないではないか。人生がいったいどれほどの長さのものだというのだろう）
譬(たとえ)ば朝露の如し　去りし日は苦(はなは)だ多く
（たとえば朝露のようなものだ。過ぎ去った日はあまりにも多く）
慨して当に以て慷すべし　幽思は忘れ難く
（嘆き、憤るばかりで憂うつが常にまとわりつく）
何を以て憂いを解かん　唯だ杜康(とこう)有るのみ
（なにをして憂いを解き放つことができるだろう。それはただ酒だけだ）

民歌をもとに詩をつける楽府(がふ)は、操の得意とするところだった。
今宵の操も冴えに冴えていた。水上の宴は操の詩によって花開き、将兵のこころは鴻鵠のごとく舞い上がる。水面に映った無数の篝火は星星が宿ったよう。清光が真冬の冷気に満ち、停滞した戦線を吹き飛ばすほどに輝いた。
だが今は、歓喜のあとの寂寥が気だるい体へ沈殿するばかりだ。
操は首を揺すって倦怠を振り払おうとした。しかし黒い澱にも似た不快感はおさまるどころか次次とあふれた。頭を打ち砕いてしまいたくなる。その衝動に耐える。

焦りの回虫が身中へ巣喰いはじめたのは、十月にこの赤壁へ布陣してからのことだった。
江南の地は、冬であるというのに瘴癘の気が垂れ籠め、多くの将兵が風土病に冒されている。長江へ浮かべた船は間断なく揺れ、人の臓腑を掻き乱す。中原の兵が南の気候に弱いと予想してはいたが、病の蔓延が如何せん速すぎて手の打ちようがない。
甘く見ていたというほかなかった。もう年末だ。静まり返った戦線や崩壊する面目、軍兵の消耗に操の辛気は募る。
なにより操を辟易させるのは、船が揺れるたびに臓腑の底からこみあげる吐き気だった。
嘔吐の予感は突然に喉を襲い、そのくせいざ吐こうと身を折っても何も出てきはしない。近ごろは心得たもので、吐き気を催しても額を垂れて辛抱することを覚えた。だが不快であることに変わりはない。時とともにましになるということもなかった。
ふたたび吐き気に襲われ、操は組んだ指の上へ額を押しつけた。卓の下で膝が小刻みに震えている。
船の揺れのせいだ。そうおもいたい。ただの吐き気だ。恐れてなどいない。
船室へ迫る足音に気づいて、操は額をあげた。従者に顎で促し扉を開けさせる。船室の外は灯明に乏しくほとんど虚無のように見えた。
闇へ浮かび上がった二人は、胸の前で両の拳を合わせ長揖した。
「丕です」
「植です」
息子たちが室へ足を踏み入れると、その戎衣へ綺羅となった灯が宿る。
「父上」
脱兎のごとく駆け寄ってきたのは、弟の植だ。まぶしいほどに白い八重歯をくちびるからこぼし、卓へ広げた木簡をのぞき込む。
「詩を書いていらっしゃったのですか」

筆を投げてしまっている手前なんとも答えがたく、操は曖昧に頷いた。
植は感嘆する。
「さきほどの宴で父上が詠まれた詩。ぼくは感銘を受けました。壮大で、精悍で。ぼくも、いつかは勇猛な軍人になりたいものです」
意気込んで話す鼻から鼻水が飛んだ。植は今年で十七になる。困惑するほど子どもじみているが、その無邪気さは操の焦燥をいくらか和らげた。
「月明らかに星稀に」
胸の前で指を組み植は歌いだす。

月明らかに星稀に　烏鵲(うじゃく)南に飛ぶ
(月は明るく、星がかすんでしまうほどだ。かささぎは南へ飛んでいき)
樹を繞(めぐ)ること三匝(みまわり)す　何れの枝にか依るべき
(樹のまわりを三度もめぐる。どの枝にとまるべきか逡巡しているのだ)
山は高きを厭わず　海は深きを厭わず
(山は高ければ高いほどよい。海は深ければ深いほどよい)
周公　哺(ほ)を吐き　天下心を帰す
(周公旦が人材を求めたように、わたしも天下の名士を求めよう)

「子建(しけん)、父上のご用が先だ」
兄の丕が、鷹揚として船室の中央へ歩を進めつつ弟をたしなめた。植の顔とは真逆に、厳しく隙のない顔をしている。揺れる灯が、その切れ長の目へまるで執念のように宿っていた。
可愛げのない。
操はこころ密かに舌打ちをした。ここへは植だけを呼ぶべきだった。どのみち大した用などなく、戦に臨む息子たちへかまってやるのも悪くはないという親心を示したにすぎなかったのだ。

馬鹿馬鹿しい。数えきれぬほどの死地をくぐった猛者がおもうことではなかった。たとえ我が子であったとしても、他人へ無駄に情をかけるようになってはお終いだということを、この五十年で味わい尽くしてきたはずだ。

操の心中など知るよしもない植が、音曲に乗るように体を揺らしはじめた。隣の丕は、それを目で戒めたほかはただじっと立っている。

操は丕の冷たい瞳を見やった。

いつのころからか、丕のすべてが許せなくなっていた。

きっかけというのはない。愛した息子は、時を経るにしたがい腐敗していく。

丕以上の詩才を植が示せば、丕が堕落したようにみえた。略奪した女を妻とすれば姦淫を働いたようにおもえた。そしてなにより、父である自分とまるで似ない容貌を見るにつけ、丕が重大な裏切りをはたらいているようにかんぜられる。

船が大きく揺れた。

外が騒がしいような気がしたが、風がひときわ強く船体を叩き、はっきりとは聞こえない。

丕が横目で窓を見やる。小さな黒目が舐めまわすようにぐるりと船室を巡る。白目が大半を占める切れ長の目は、怖気をふるうほどに酷薄だった。

宴の興奮のさめやらぬ植が、愛くるしい仕種で身を乗り出した。

「子建」

詩を語ろうと開かれた口を丕の舌打ちが制した。

冷酷な瞳に射すくめられた植は、慌てたようすで体を引っ込めた。とまどったように伏せられた黒目がちの瞳がこぼれ落ちそうに潤んでいる。

自分によく似た植の顔が沈んでいる。それは、操自身が丕に凌虐されているように見えた。嘲られ、罵倒され、足蹴にされる男。それは操だ。

急激な吐き気が喉元へ込みあげた。
どん、と船が揺れた。
波の音。叫喚。無数の足が甲板を行き来する。浮橋がたわむ。なにかの、爆ぜる音。
植が窓へ駆け寄った。突き上げ戸を跳ねあげ、首を出す。
「父上、船が」
驚愕に見開かれた目は尋常でなく揺れていた。
操も窓を見た。
赤かった。
「火だ。火が」
たれかの悲痛な声がする。
吐き気が奔流となって操を突き上げる。
吐かなければ。体を起こす。膝が震える。
「父上」
丕が操の肩を支えた。操は振り払った。丕の瞳がいっしゅん見開かれたのち、針のごとく細められた。
火が映っている。執念のように。
丕の宿意なのか、操自身の厭悪なのか、はっきりとしない。
操は息子を睨めつけた。伝令が駆け込んでくる。
窓の外は、赤かった。

泥丸　どろまんじゅう

建安十七年　九月　丁儀

小さなほうは汚泥に似ている。大きいほうは老人の痰。濁ったうえに黄ばんで、どうしようもない。

丁儀（ていぎ）は斜視だった。

てんでの方に向いた目玉は大きさが揃わず、瞳は死んだように白濁している。膿が凝ったような色の白目からは腐臭が漂ってきそうな気さえした。そのうえ鼻がひしゃげ、浅黒い肌には毛孔が目立った。くちびるが無垢な薄色であることも救いにはならず、ちんばに配された部品の様悪さをさらに際立たせているだけだ。

儀はおもった。

凄惨な、たとえば火傷や刀傷の走った痛痛しい顔であればまだ救われる。そういった類の顔は、恐ろしい天意のくだった残滓を殊更に見せつけ世人の同情と畏怖とを買う。

しかし儀の場合は、生まれながらに造形の狂った、痴人めいた醜さだった。いつのときでも人人は憐憫ではなく嘲笑を儀へ浴びせる。

本当に悲しいのは、自分のような人間だ。

おぞけを震うような悲劇にみまわれるよりも、生まれついて有無もなく滑稽を演じさせられるほうがよほど恐ろしい。道化の役から降りたいといくら願ったところで、舞台がおのれの肉体である以上、逃れるには死をもってするしかないのだ。

朽ちた蓮葉のたゆたう水面。映る像。濁った、目。

儀はくちびるを噛みしめる。水のおもてへ浮いたおのれも、薄色のくちびるを噛んだ。

にわかに立ち起こった飄風に水鏡は千千と砕けた。幾万もの破片がきらめく。

儀はおもわず目を閉じた。
瞼の裏には、水に映った像よりもおぞましい姿のおのれがうずくまっていた。その顔は、真夏に打ち捨てられた遺骸のごとくぐずぐずに腐敗していた。腐爛した頭皮。鼻汁が饐える。やめてくれ。儀は閉じた目を覆った。膿にまみれた瞼が、どろりと糸を引いて崩れる。腐臭のする汁。肉。
「正礼（せいれい）、どうしたの」
首をもたげると、あられもない素足がすぐそばにあった。
白い肌を視線で辿っていくと、排便の体勢で裳裾を端折った曹植がいた。細い指で瓢箪の紐を弄びつつ、ぐいぐい酒を飲んでいる。仰向けた顎にはまばらに鬚が生えていて、その中を酒が伝い落ちる。濡れたくちびるが赤い。
「悪い酔いしたなら吐いちゃいなよ」
熱く火照った手のひらが儀の背をさする。そのやわらかさが儀を幾分か楽にさせた。ほっと息を吐く。胸はまだ苦しい。
「あにうえ、お顔の色が悪いですよ」
丁翼（ていよく）は、右へ左へ機嫌よく揺らされる植の肩を支えている。儀とは異なりしかと焦点を結んだ瞳が心配そうに瞬いた。
「水を運ばせましょうか」
「いや、構わないで大丈夫だ」
弟へ向かって儀はかぶりを振った。よだるい上腕に力をこめ水際から体を起こす。
額を上げると、かなたまでが一望のうちに見渡せた。遠く銅雀台に宿った無数の篝火が儀の目を打つ。天に届かんばかりの威容を誇る高楼は銀漢のまばゆさをもって燦然とそびえている。地上の煌に追いやられた星星は、はるか上天で靄のように白くけぶる。豪奢な地上に劣らぬ月だけが、ただ一点、死に顔のようなものすごい光明を湛えつつ、皎皎と夜空へ浮かんでいた。
植が翼を振り払い、甘えかかるようにして儀の背をさする。
「吐いちゃいなよ」

「公子の面前で、そのような」
「いいよ。ほら」
どんと背を叩かれると胸の奥から反吐がほとばしった。池のおもてに飛沫があがり、甘たるい悪臭が立ち込める。
植はいっこう構う様子もなく、それどころか可笑しくてたまらぬといったふうに屈託のない笑いを放った。手を打ち鳴らす代わりに儀の背を激しく殴打する。胃の腑が踊り跳ね、中身がすっかり飛び出した。
儀もわらった。吐いたばかりだというのにもっと酒が欲しくなった。自分の人生には理不尽なことが多すぎる。
「丁正礼などの妻となっては、あねうえがおかわいそうです。あの男は醜いのですから」
曹丕が、こう曹操へ提言した。
丕の一言で、儀が妻としてもらい受けるはずだった操の娘は別の男へ嫁いだ。そう美人でもなさそうな女への未練などなかったが、操の義子になる道は絶たれた。
儀は呆然となった。出世が遅れたことよりも、おのが容貌が人生にあたえる影響の大きさに愕然とした。
自分を産み落とした両親は、内面だけでも恥ずかしくないよう学問をしろと言った。弟の翼は、あにうえほど詩文をよくすれば容貌など問題にならないと言った。曹操は、醜くとも才能があればよいと言った。
すべて嘘だった。くだらない慰めだった。
鏡をみる時間が増えた。
いくらもしないうちに、銅鏡の明白すぎる像には耐えられなくなった。覗くのは、もっぱら水鏡だ。酒のおもて。河のせせらぎ。水瓶の中。庭の池。妓女の瞳の、涙の膜。
幾年たとうともこころは癒えなかった。なんでもないことのように振る舞うことだけは得意になったが、古傷は、ふとした瞬間に痛みだす。

反吐の流れる池のおもては、かすかな揺れを残すだけになった。植の笑声だけがいまだけたたましく鳴り響いている。
池の縁へ腰を下ろし、植は反吐の浮いた水面を足で蹴立てた。汚れた水の上でなにもかもが混じり合う。映りこんだ月も星も、かなたにそびえる銅雀台も、さざ波と反吐に飲まれてただ鈍く光るだけの渦と成り果てた。
「公子、客を敬愛し」
植が歌う。先ほどとは打って変わって不気味なほどにか細い声だった。
「宴を終るまで疲るるを知らず」
詩の内容に儀は覚えがあった。昨年、丕がこの銅雀園に催した宴席で、植自身が兄を称えて詠んだものだった。
「清夜、西園に遊び、蓋を飛ばして相追随す」
清らかなこの夜、公子は銅雀園に遊ばれ、賓客は各各おおいを飛ばすほどに車を駆って従う。
吟ずる声は、農婦が絹を紡ぐように細く長く夜を渡っていく。
背中を丸めたままで、儀は植を振り仰ぐ。
白い額。低い鼻。濡れた唇。そのどれもが尋常だった。だが細められた二皮の目は、まったく正常な焦点を結んでいるにもかかわらず、瞳がぬるりと、まるで茹であげた白身のように濁っていた。
植がこんな目をしていることに、儀ははじめて気づいた。
「ねえ、正礼」
植は池を蹴立てながら流し目で儀を見た。うるんだ黒目が媚びるように忙しく動く。
「正礼のところは、兄弟仲はいいの」
目を転じてみれば、ひとり醒めていたはずの翼はいつの間にか石畳へ倒れ伏し従者に介抱されている。さきほど銅雀台でしたたかに飲んだ酒が今更ながらに回ったらしい。
兄弟の仲など、儀は考えたこともなかった。自分が栄達すれば弟もそうなるし、逆の場合もしかりだ。弟にたいしてはそのていどの

おもいしか持ち合わせていない。翼にしても同じだろう。
「悪くは、ないのではないでしょうか」
「そう」
植は例の濁った目をつと伏せて、池から素足を引き抜いた。足首に反吐がへばっている。それを指で拭いながら、植は独白のようにかそかな声を漏らした。
「ぼくと哥哥（あにうえ）は、どう見える」
植は指についた反吐を舐めとる。
「仲がよく見えるかな。ぼくと、哥哥」
「そのようにお見受けしますが」
植の奇行にぞっとしながら儀はお座なりに頷いた。植と丕だけではなく、曹操の息子はみな仲睦まじいように見える。だれとだれが憎み合っているという噂は聞かなかった。
「千秋、長（とこし）えに斯くの若（ごと）くならん。ずっとこのままでいられればいいなって、あのときぼくはおもったのになあ」
植が石畳の上へ大の字になった。聞き苦しいおくびを漏らした喉から、ふいに反吐が溢れだした。儀はあわてて植を抱き起こし水面へ俯かせた。駆け寄った従者たちを押し留め、馬車をまわすよう言いつける。
植の喉からほとばしる反吐は、水面をもはや取り返しのつかないほどに覆いつくした。衣も反吐まみれだ。悪臭がたちのぼる。
「どうして父上は、ぼくと哥哥を違うふうに扱われるんだろう」
さきほどの宴で植が詠んだ？登台の賦？は曹操に絶賛された。ひき比べて、丕はそれほどの扱いを受けてはいなかったようにおもう。
あのときの丕がどんなふうだったか、儀は今さらながら気になった。だが、どんなにおもいを巡らせてみたところで面影すら浮かんではこない。
「ぼくは、哥哥の影でいられれば、それでいいのに。引き立ててくださらなくっても構わないのに」
植はそう呟いたきり濁った目を閉じた。その頭が儀の肩へもたれ

かかる。口腔に残った反吐は流れ、腐った桃のように糸を引いて垂れおちる。儀の手へ滴って、ぽつりと寂しげな音をたてた。
車輪が近づいてくる。馬車が到着したらしい。
植の腰へ儀は腕をまわした。細い手足から想像されるよりも肉がだぶついているが、それでも十分に細かった。でくのように動かない植を引き起こすために、儀は半ば腰を起こした。
馬車と目が合う。
朱い透かし彫りの肘掛けに手を置いたのは、丕だった。
青白い額には勘筋が走り、かすかに開いた薄いくちびるが細かくふるっている。恐ろしいほど眦の切れあがった三白眼は、雷霆のとどろきに似た憎悪と、汚泥をこねまわしたような侮蔑とを放って、儀をたじろがせた。
さきほど植が称えられたとき、丕はこんな顔をしていたに違いない。おそらく、儀の容貌をあしざまに操へ告げたときも。
植が、うんと呻いて儀の首筋へもたれかかった。小さな舌が皮膚を掠める。唾液に濡れた部分は風にひやりとし、そののち急激に不快な痒みを催した。儀は植の体を抱えなおした。
丕の目が細められる。冷眼は容赦のない蔑みをもって儀の目を射る。
儀は、植を強く抱いた。
植の濁った瞳がどこに由来するのか、いまはっきりとわかった。丕からすれば、儀の醜さも、弟の詩才も、同じように嫌悪の対象なのだ。
おのれの醜さに沈んでいた絶望が、姿を変えて燃えたちはじめた。
曹操のあとを継ぐことも、人民の上に立つことをも、けっして丕にさせてはならない。この男は、醜すぎる。腐敗している。
おのれの眇が、いまやっと焦点を結んだ気がした。
遠くから車輪の音がする。

蘭室洞房　ひそやかなふしど

建安十七年　八月　甄氏

親からもらった名を捨てたとき、人生は自分のものでなくなった。

これからはただ甄氏（けんし）出身の女という肩書きと袁家（えんけ）の嫁という椅子を抱いて生きていく。

のっぺりと平坦な生活に不満がないでもなかったが、当代随一の名門へ嫁ぐことができたことだけでもよしとしなければならない。まわりから「甄氏」と呼びかけられて戸惑ったのは最初のころだけで、一月もすればすっかり慣れた。

女の生きてゆく道とはこういうものだ。

だから曹丕によって袁家から略奪されたときも、乱世とはこういうものだとおもっただけで溜め息ひとつ漏れなかった。

甄氏が抱いている理想といえば、どうせ連れ添うのなら背の高い男がいいという考えとも呼べぬ好みだけで、その点、丕は理想にかなっていた。丕の父である曹操も甄氏を欲しがったというが、彼は大変な短躯だという噂だった。実際に会ってみるとその通りだったので、甄氏は夫になったのが丕のほうでよかったとおもった。

甄氏の肩へ湯がかけられる。

あまやかな温みを含んだ湯は肩へ胸へ腹へ、そしてひそやかな漆黒に守られた股の間へとすべり落ちていく。

体を拭う行為は、女としての甄氏のこころを充分すぎるほど満たしてくれる。

侍女が進み出る。やわらかな絹で肌がこすられる。甄氏の素肌は羊脂にも劣らぬ艶と白さを備えて月影と水滴に濡れる。

曹軍に侵略された袁家の屋敷。

奥まった臥所にひとり腰を下ろし、甄氏は虚空を見つめていた。

「あなたは、お逃げになりませんの」
夫の妾は吐き捨てるようにして尋ねた。
締め切らない扉からものの焦げるにおいが這い入ってくる。
甄氏には蜜を炙ったがごとく芳しくおもわれたが、妾はつんと尖った鼻先を皺め、みすぼらしい布切れを手早く裸体へ巻きつけた。簪を抜いて雲髪を散らすと、白粉の剥げた斑顔は夫が慈しんだとは到底おもえぬほど俗悪に見えた。
「こんなときでも、とりすましていらっしゃのね。変装をお厭いなら殺されておしまいな」
窓から逃れた女を、甄氏はなんの感慨もなく見送った。
なるようにしかならない。
蜜の香りが濃厚になる。足音。怒号が渦巻く。扉が蹴り開けられた。
あまい蜜の、におい。
一番に駆け込んできた男は、甄氏を見た瞬間息を飲んだ。まっすぐに近づいてきて甄氏の顎をとる。顔を上げさせられたまま甄氏は男を見た。高い鼻と、煤で汚れた眉間へ走った二本の縦皺が鮮やかだった。
連れ出された先でまず見たのは、逃れた妾の遺骸が吊された庭木だった。脂の巻いた臓腑。死相は虚無。血だまり。夫が与えたのであろう佩玉が風に吹かれ、女の腰で珊珊（さんさん）と鳴っている。
なるようにしかならない。
虚空を見つめるのとおなじ感慨で甄氏は女の死体をながめた。
それからのちは袁家の女であったときと変わらなかった。甄氏と呼ばれ奥まった寝室で終日すわりつづけるだけだ。
前の暮らしと異なることといえば、夫となった丕が甄氏の睫毛は長すぎるとしきりにぼやくことだった。物憂げな影のかかる目元を密かな自慢としていた甄氏は、夫からそう言われることが不満だった。
不満。生まれてはじめて持った感情に甄氏は我ながら驚いた。新

しく夫となった男を心底好いてしまったらしい。
甄氏は、前の夫へ用いた艶かしい態度を改めた。長い睫毛を不満げに弄る夫は、豊満な肉体や赤くぬった唇など妖艶さを醸すものには興味を示さなかったからだ。宝玉や衣帯をもって飾り立てるよりも素のままの甄氏を丕は好んだ。甄氏は子どものように無垢であることをこころがけた。
こころを用いるべきことができたぶん人生は色味を帯びた。夫が寝室を訪れる夜を指折り数えて待つ日日は苦しくもあったが、同時に心が踊りもした。よろこびというものを知る日が来るとは、かつての自分はおもいもしなかった。
あれから八年が経つ。夫婦仲は円満だ。七つになる長男を筆頭に娘にも恵まれた。夫より五つ年上の甄氏はもう三十に手がかかっているが、寵愛の衰えることもない。夫の足が遠のく日はいつか確実に来るにせよ、そのときが一日でも遅くなるよう甄氏は容色を保つことに努めた。
侍女に体を拭かせる。ほんのりと紅に染まった素肌から湯気が立ち上っている。あたかもそれは甄氏自身の若さのようだ。逃さぬよう薄衣で包みこむ。湯上りの顔色そのままの薄い夜化粧を施し、しっとりと潤った爪先を絹の履（くつ）へ収めて寝室へ向かう。欝金（うっこん）を焚き染めた帳を潜り、寝台へ腰を下ろした。敷布に灯穂が散る。流麗な細工の施された朱い窓枠の向こうで月が明るかった。
瞼を閉じる。
「姐姐（あねうえ）」
呼ばれた気がして、甄氏ははっとした。
いるはずがない。それなのに予感めいたものが胸にこみ上げ、甄氏のこころは千千に乱れた。
夜風にもつれた髪を撫でつけ、窓へ歩みよる。
「姐姐は、お綺麗です」
夫に連れられ初めて顔を合わせたとき、曹植はしきりと甄氏の容貌を讃えた。

「河北一の美女とお聞きしていましたが、それは嘘でしょう。姐姐のお美しさは九州一です」
そう言って植はぶしつけにも甄氏のそばをぐるぐるとまわり、四方から余すところなくその肢体を眺めた。
突然、大声で歌い始める。
「北方に佳人有り。絶世にして独立す」
漢の李延年（りえんねん）の詩だ。
音程は揺らいで定まらず、調子っぱずれも甚だしい。あまりの音痴に侍女たちが袂で口押さえて笑いを堪えている。
「一顧すれば人の城を傾け、再顧すれば人の国を傾く」
「子建、それぐらいにしろ」
咎めた丕の顔を甄氏が見やると、あれほど峻厳に刻まれていた眉間の皺が、ふやけたように弛んでいた。
傾国の美女になぞらえられた妻を誇っているふうではなかった。和やかな丕の表情に浮かんでいるのは、気の利いた賛辞を述べた弟への満足だった。
丕と植の視線が絡み合う。
丕の目が細められる。植の瞳が甘い。ねっとりと濃厚にへばりあった二人は丹念により合わせた絹糸のごとく癒着して、甄氏の入り込む隙がない。植が甘ったれたふうに鼻を鳴らす。くちびるがほころぶ。丕が弟の肩へ指をかける。甘いことば。眉間に皺は寄っていない。
植が、勝ち誇ったような流し目を甄氏へおくった。
それから後も、会うたびに植は兄嫁を褒め讃えた。あまりの熱言にまわりの者が眉を顰めようともいっこう構うようすはない。
褒められれば褒められるほど甄氏は植を憎悪した。
汚らわしい子。
唾を吐きかけてやりたい衝動を堪える。
賛美のことばを口にする植の先にはいつでも必ず丕がいる。丸い瞳が、しきりと瞬く瞼が、甘い甲声が丕へ媚びている。甄氏を出し

抜こうとしている。丕との仲を見せつけている。
十も年下の義弟が甄氏は憎くてたまらなかった。
あなたの知らない哥哥をわたくしは知っているのよ。裸体。愉悦。眠るときに睫毛がつくる影。あなたはどれかひとつでも見たことがあって。
口にだして嘲ってやりたかった。
だしぬけに寝室の扉が開かれた。甄氏は振り返った。ことばもなく乱暴に臥床へ押し倒される。身体がまさぐられる。
甄氏は目を閉じた。
肌の上をささくれた爪が滑る。浅く裂ける皮膚。痛みは鋭い。割り入ってくるものは断ち割るような痛みを甄氏へ与えたのち、鈍痛へと変わった。苦痛だけが与えられる。
甄氏は義弟への優越感に浸った。
丕は自分だけを求めている。夫の背へ腕をまわしきつく縋りついた。体内に取り込んだ夫を千切れんばかりに締めつける。
「なにか、ございましたの」
事後、月光で青く染まった背に甄氏は声をかけた。
丕は、端整な筋に覆われた肩へ夜着を引き上げる。房事に流れた汗が肌の上で浅く光っていた。
「なにもない」
髻のほつれた夫のうなじへ甄氏はくちびるを押しつける。汗と脂のにおいがする。たおやかな夫の肉体から男の香りのすることに甄氏は満足した。このひとの妻なのだということが嬉しい。
自分が、妻なのだ。
「あなた」
硬い筋の張った脇から尻へ甄氏は指を這わせる。太腿を擦りあわせると、先ほど押し入られたところが鈍く痛んだ。
ぞんざいに身体を扱われたのはこれが初めてではない。三年ほど前、夫が赤壁の敗戦から帰陣した折からたびたび行われることだった。ただ、今夜の夫はいつになく暴虐だった。深淵へ沈んだ者が激

しくもがくように必死だった。
手首を掴まれる。敷布へ押しつけられる。指の食い込んだ肌が痛む。
甄氏の瞳をのぞき込む丕の目が、闇に呑まれて色をなくしていた。冷たく、底がない。
「睫毛が」
丕が息を吐いた。口臭が酷い。酒と、よくわからない沈んだ悪臭だった。甄氏は胸いっぱいに吸い込む。
「長すぎますでしょうか」
「短いほうがいい」
「はい」
丕がふたたび圧し掛かってくる。乳房を押しつぶされる痛みに甄氏は呻いた。淡く濡れた股へ侵入してくるものがある。腰が打ちつけられるたびに身を刺し貫くものは、甄氏を恍惚とさせた。
愛している。そして、愛されている。
丕の眉間へ深く皺が寄る。苦しげに寄せられた細い眉に悦楽が滲む。伝い落ちる汗が甄氏の頬を濡らす。
体欲に歪んだくちびるが、うっすらと開いた。
「子建」
甄氏は雷霆に打たれた。
大きな二皮目。黒目がちな瞳。刈りそろえたかのように、短い睫毛。
植。
甄氏は気づいた。義弟の目は、あまりにも自分の目元に似ている。ただ一点、睫毛の長さをのぞいては。
なぜ自分が見初められたのか。なぜ、ここへ連れてこられたのか。悟った甄氏の目に涙が溢れた。目の前が白く黒く瞬いてやがて渦を巻く。つながった股座が痛い。押しつぶされた乳房が痛い。全身が痛い。
長すぎる睫毛。

悔しさに、全身が焼けるように火照った。それに気をよくしたのか丕の律動は激しくなる。痛む。胸の奥が痛む。

植の甘ったれた顔が甄氏の脳髄へへばりついている。義弟の無邪気な笑みの底には、嘲るような黒い色が汚泥をなして沈んでいた。

植は、丕の肩へもたれかかって頬を寄せる。丕の顎へくちびるを押しつけ、嫌らしくぬめる唾液の痕をつける。なにごとかを兄の耳へ囁きかける。丕が笑った。眉間の皺を緩ませて、目尻を目一杯に下げて、笑っている。甄氏の見たことのない顔だった。植が甄氏を見た。いかにも無垢であるように瞼を細めている。短い睫毛がきらめく瞳へ影を落としている。睫毛の先を丕の指がなぶる。植はくすぐったげに首をすくめる。黒く、短く、清潔な、少年の色を持ったあの睫毛が憎い。自分があんな子どもの身代わりだなどと信じたくはなかった。

甄氏は夫の背へ爪を立てた。丕の両眉は呻くように寄って、眉間へ深い皺を刻む。幽山にみる渓谷のように美しいこの皺を植は知らない。しかしそれはなんの慰めにもならなかった。こんなものが何になるだろう。甄氏が手にしたいのは、こんなものではない。

妬ましさは甄氏の体を熱くする。丕と擦れあったところから官能がこみあげる。

目を閉じれば、瞼の裏に貼りついた植が優越の視線を投げてよこす。甄氏はかっと目を見開いたまま夫へ縋りつく。ほつれた髪が目玉を刺そうとも流れる汗が目尻を埋めようともひたすら目を開いて、すべてを押し流す絶頂が訪れることを、ただ、祈った。

花里胡哨　けばけばしい

建安十六年　六月　何晏

かなたに陽炎がゆらぐ。陽炎ではない。あれは、銅雀台だ。

何晏(かあん)は、あずまやへと急いだ。屋根の下へ落ち着くと、従者に帳をかかげさせ中天へと昇り急く日を遮る。侍女に持たせた大鏡を覗きこむ。こめかみに汗の筋がつき、鼻の頭は爛れ、日に焼けた白目が生生しい鬱血をみせている。

おのが白皙の日色に輝くさまを賞美しようとわざわざこの銅雀園までも出向いたのだが、とんだ失敗だった。日午までしばらく間があるとはいえ、夏の日は烈しすぎる。

背後に控えた侍女へ命じ絹布で肌を拭わせる。たっぷりと白粉を含んだ刷毛が、乱れた化粧を滑らかにしていく。獣毛のすべる心地のよさに、晏はすべてを委ねた。

あずまやの甍が偉容を示す先に、蓮が揺れていた。半分がた開いた花花が水上で瑞瑞しさを湛えるかなたで、銅雀台は変わらず揺揺とたゆたっている。絢爛たる高楼が水草のごとくゆらめく姿は、嫋嫋と艶めく美女をおもわせた。

この華やかな都で、先月、晏の義父である曹操は、魏王に封ぜられた。上に帝を戴く身とはいえ、天下の権は彼の手中にあるといっていい。

晏の母は操の妾で、晏はその連れ子だ。幸いにも、操は晏の美貌と才知を目にとめ、実子以上に優遇してくれた。子どものころは自由に彼の後宮へ出入りをしていたし、いま現在は、操に推されて文人たちの集まりに顔を出している。また、義父はおのが妻にすら錦繍を禁ずるほどの倹約家であるが、晏が派手に身を装うことにはいっさい苦言を呈さなかった。

晏はしあわせだった。強大になった義父の庇護のもと、これからさらに豊かになる。この世の春。着飾るも、学問をするも、おもいのままだ。

だが、晏のこころは暗澹としている。

晏は、前途が恐ろしかった。義父は、顔をあわせるたびに皺が増え、醜く老いていく。そう遠くないうちに死ぬ。そうしたら、自分はどうなってしまうのだろう。野分のような乱世の中を軒もなしに暮らしていくことなど、掌中の珠として大切に育てられた晏にはとてもできない。行く末をおもえばおもうほど、気も狂わんばかりの恐怖に苛まれる。

ともすればすさみがちな晏のこころを平らかにするのは、おのれの玉顔と向き合うことだけだった。偉大なあの義父のこころをすら動かした、美貌。晏のいちばんの矢刃であり、本当に頼りとすることのできる唯一のものだった。

首を伸ばし、顎の裏にも白粉を刷かせる。眉は長く。艶紅を濃厚に吸った朱唇は、玉虫色に輝いた。赤い付け黒子は、眉間へのせるのがいい。指先まで白粉をはたかせる。汗で滲んでしまわぬよう、従者に団扇で風を送らせる。侍女へ預けた素手(そしゅ)をつたって、袖から脇へと風が吹き抜けていく。こころが凪いでいく。

侍女の掲げる鏡の中、晏は莞爾とほほえんだ。風に撫でられるたびに、白粉の薄膜で守られた肌から赤みがひいていく。粛粛とひいていく潮を晏はおもった。海というものを見たことはないが、きっとこんなふうに厳かであるに違いない。

美貌は波だ。すべてを飲み込む。美しくありさえすれば、きっと大丈夫だ。

鮮やかな確信が、胸底で灼灼と花ひらいた。花は、だれからも愛でられるものだ。打ち捨てられたりはしない。

「平叔(へいしゅく)」

突然の大音声に気をそがれ、晏は眉を顰めた。庭園へ目をやると、石畳を蹴立てて曹植が駆けてくるところだった。冠も吹き飛ばんば

かりの勢いで疾走する植のあとを、蓋(おおい)を掲げた従者たちが慌てて追ってくる。ばかに間抜けな光景だが、植がやるとそう無様でもないから不思議だ。あずまやのきざはしを一段とばしに駆けのぼった植は、膝に手をついて息を整える。まばらに髭の生えた顎から大きく弾む胸へと向かって汗のしずくが滑り落ちた。

半ば諦め半ば呆れながら、晏は従者から取り上げた団扇で植をあおいでやる。

「奔放なのもいいけど。子建(しけん)も二十五になるんだからさ。もうちょっと落ち着いたら」

植は、晏の義父・操の実子で、晏にとっては義弟にあたる。だが兄弟という感覚はあまりなく、どちらかといえば友人に近い。植ほどの才はないにしろ、晏も詩文をよくする身なので馬は合った。

繊細な指から紡がれる風に礼を言うこともなく、植は額の汗を拭った。

「平叔。いま、時間あるでしょ。ちょっと来て」

汗にぬめる手のひらが晏の手首を掴む。白粉が濁った。

「なにするの」

「外いこうよ」

「いやだよ」

「いいから」

大柄でも馬鹿でもないのに、植は存外に怪力だ。あずまやから引っ張りだされた晏の目に青い空が映った。かなたに湧き出た雲が強烈に白い。閃閃と光るのは銅雀台。またゆらめいて、夢のよう。暑い。つんのめりながらも、晏は袖で顔をかばった。

「待ってよ。日に焼けちゃう」

「そんなこと気にしなくてもいいじゃない」

馬車へ押し込まれる。鞭打つ音が聞こえて、追ってくる従者たちは流れる景色のかなたへ消えた。車輪が石畳をりんりんと噛む音だけが、鮮やかに耳へと響いてくる。

「どうしてこういう無茶をするの」

座席へ身を落ち着けつつ、晏は溜息を吐いた。
植はいま、もっとも大切な時期にある。兄である丕と、父・操の後継を争っている最中なのだ。馬鹿をやって評判に傷をつければ致命傷になりかねない。
「子桓(しかん)義兄さんに負けちゃうよ」
「平叔は、ぼくの味方なの」
「まあね」
植は素直でおおらかであるのに比べ、丕はどこか暗くいじけたふうで、なにかにつけ嫉妬をする癖があるようにみえた。破天荒で危なっかしくはあるが、植のほうが跡継ぎに向いているように晏にはおもえる。義父のこころも同じらしく、長子として丕を引き立ててはいるが、植へのおもいを捨てきれていないのが傍目にもよくわかる。
植は指を組んで、顎の下へ当てた。
「でもぼくは、どっちでもいいから」
「どっちでもいいって」
「だって、面倒くさいじゃない。ぼくは、哥哥(あにうえ)と争ってまで、父上のあとを継ぎたいわけじゃないもの。まわりが騒いでるだけ。正礼(せいれい)なんて、命かけちゃってるし」
「正礼ね。うん、たしかに」
植の側近としてのさばっている丁儀の顔を、晏はおもい浮かべた。斜視に強い欲の宿った、醜い男だ。彼が丕に嫌われることは並でないから、この後継争いはまさに命がけだ。失敗すれば、左遷ではすまない。
ひときわ大きく車輪が軋んだ。馬車が宮門をくぐったのだ。晏は、きらめく町並みを見た。
「どこまで行くの」
「いいところ」
「いいところって」
「いいところだよ」

大通りを逸れ、馬車は狭隘な坂を登りはじめる。色町だ。建ちならんだ青楼から妓女たちが秋波を送ってくる。鮮やかな酒旗の垂れた軒に馬車は横づけにされた。植に引かれて足を踏み入れると、店内では鮮やかに着飾った男女が杯をまじえていた。彼らの視線が、いっせいに晏へと集まる。

「公子、すげえの連れてきたな」

遊侠風の男が言うと、まわりの男たちはいっせいに口笛で囃した。?公子?は平たく言えば?おぼっちゃま?で、どうやら植のことらしい。

「ぼくの義兄さんだよ。綺麗でしょ」

植が胸を張ると、侠客たちは、晏には理解できない野卑なことばで応えた。賞賛されているらしいことはわかるが、詳しい意味はわからない。いつもならばこころに響く女たちの熱い視線も、いまは居心地がわるいだけだ。晏は、植の袖を引っ張った。

「子建、帰ろうよ」

「どうして。遊んでいこうよ」

「正礼を連れてこればいいじゃない。どうしてぼくなの」

「だって、平叔は綺麗だから。見せびらかそうとおもって」

神にも勝る詩文上手がこんな直載なことばを使うと、平常よりもずっと胸に響く。得な性分だ。晏は、いつもほだされて付き合ってしまう。

差し出された杯を晏が受けると、居並んだ侠客たちは一斉に手を叩き、歓声をあげた。甘い。いい酒だ。酔い乱れることをよしとはしない晏だったが、いまはもう捨て鉢になっていた。義父もよく言ったものだ。

ただ杜康あるのみ。

したたかに酔い、道へ出ては闘鶏をし、郊外へ馬を馳せては兎を狩る。晏は弓は不得手であったが、植が仲間とともに矢を放つさまを見るのは楽しかった。蹴鞠をし、木あてをし、おもう存分に遊びまわる。

白粉はとうに溶けて額を伝い、頬から顎へと流れ落ちていたが、気にすることはない。自分の美貌へ耽溺する以外に、本当にこころを晴らしてくれるものがあることを、晏は生まれてはじめて知った。
「子建」
「なあに」
下着一枚になって毛鞠を放りつつ、植は熊の掌の炙り焼きをかじっている。まだ日は落ちていないが、遊びつかれて戻った妓楼の中は、遊侠児の帰りを待ちかねたかのように無数の灯明がかかって、まさに白昼夢の様相だった。
「子建は、いつからここへ通ってるの」
「一年。二年。もっと前からだったかな」
煎った鼈(すっぽん)の足を、植は長く伸ばした舌へのせた。くちなわに呑まれるかわずのように、焼けた足から剥がれた肉が喉の奥へと消えていく。
「正確には覚えてないよ。意味がないもの」
「子桓義兄さんと争うようになってからじゃないの」
「ぼくは、お酒と遊びが好きなだけ」
本当に無邪気に植が笑うので、晏はそれ以上は尋ることをやめた。羹(あつもの)の椀をとる。箸など使っていられない。汁につかった蝦(えび)を指でかきこむ。しなだれかかった美姫が、汚れた晏の指先をしゃぶってみせた。彼女を抱き寄せ、鯉の膾(なます)を小さな口へと運んでやる。
「ねえ子建」
そこまで言って、晏はぞっとした。
一条の白髪が、植の鬢に走っていた。
「子建。それ、どうしたの」
「なに」
「髪。ううん。なんでもない」
顔を背け、晏は美姫のつんととがった鼻先を凝視するようつとめた。
たったひとすじの白髪は、一瞬にして植の暗いおぞこを映しだし

た。晏は、首を伸ばして覗き見る。奥底には輝かんばかりに着飾った丕がいた。それは、天子の装いだった。隣では、植がしきりに頭を地面へ打ちつけている。あまりに激しく打つものだから、泥に汚れた額から血が噴きだした。それでもひたすらに頓首しつづける。丕が足を踏み出すと、植は舌を伸ばして兄の履(くつ)を舐めた。額から滴る血が履を汚す。また舐める。覗きこむ晏を、ふと植が仰ぎ見た。その顔は、ひどく幸福そうだった。

抱きよせた美姫が身をよじった。媚態をつくるその鼻先に、珠のような汗が浮いている。毛孔がやけに黒黒として見え、晏は目を逸らした。

この宴は、快楽ではなく、自殺だ。植は、命を削っている。兄のために、みずからが朽ち果てることを望んでいる。

それは、晏のこころには適わないことだった。晏は、生涯を安泰でいたかった。大いなるもの保護され、適当な官位について、平安を得る。そのうえで、着飾り、詩文をし、安楽に暮らせればそれでいい。なにかのために命を捨つるつもりなど毛頭ない。

暗澹たる気持ちが甦る。美姫を突き放し、晏は立ちあがった。植が破滅へと向かうかぎり、こうして共に飲んでいては、安泰どころか陰惨な未来にしか行き着くことができない。植とは、道を分かたなければならない。

「平叔。どうしたの。酔いすぎちゃったの」

植が、あいかわらず無邪気に微笑みかけてきた。晏は胸が悪くなった。笑顔。ひとみ。一条の白髪。巻き込まれるのはごめんだ。

「子建。ぼく、帰るよ」

「どうして。まだ夕方じゃない」

「帰る」

にわかに崩れた化粧が気になりだした。頬に手をやると、とけた白粉がべったりと指にへばる。死骸のようだ。

ぼくは、こんなところでなにをしているんだろう。生きるためには、もっともっと美しくならなければならない。ひとを惹きつけな

ければならない。そのために必要なのは、快楽じゃない。酒じゃない。植じゃない。もっとはっきりした。ぼくを救う。なにか。なにか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8133j/

頓首頓首、死罪死罪

2010年10月9日04時34分発行